同志の人：山本有

戯曲集

同志の人々

新潮社出版

大正十三年十一月十二日印刷
大正十三年十一月十五日發行

定價壹圓八拾錢

著作者　山本有三
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（代表）八八八〇　六番
八八〇〇　七番
八〇〇〇　八番
九八七六番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

〈同志の人々〉

特選　名著複刻全集　近代文学館　昭和46年5月

目次

同志の人々　二幕……三
海彦山彦　一幕……六三
本尊　一幕……九一
熊谷蓮生坊　三幕……一一五
女中の病氣　一幕……一七九
指鬘緣起　三幕……二一九

同志の人々

山本有三著

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

同志の人々

二幕

一九二三年三月

人物

橋口吉之丞　寺田屋騒動に加擔した薩藩の士。
谷元兵右衛門　同
林庄之進　同
有馬休八　同
堤小兵衛　同
是枝萬介　同
吉田清左衛門　同
永山彌一郎　同
田中河内介　同、中山大納言の家臣。
共息磋磨介　同

見張の役人。

時代

文久二年五月一日。夕刻より夜にかけて。

場所

船の中。

第一幕

大きな和船の艫の間。

右側は艫の戸立、左側は隔の壁板で仕切られてゐる。壁板には出入の引戸がついてゐるが、外から堅く鎖がおろされてゐる。

正面は腰の船板。その上部に四角い小窓が二つほど開いてゐて、そこから夕日があか〳〵と差込んでゐる。部屋の中に太い柱が一二本。凡てが古びた感じ。

有馬は立つて小窓から外を眺めてゐる。橋口は腕をまくし上げて谷元に傷を卷さかへて貰つてゐる。堤は鉦聊さうに柱にもたれかゝつてをり、林と、永山は默然と端坐してゐる。是枝は入口から遠い、隅の方の柱の蔭に腹匍ひになりながら、金物のやうな堅いもので頻に床板を叩いてゐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

る。そしてまた床に耳を押し當ては、何かを聽き取らうとしてゐる。その近くに吉田がゐる。年齡は二十三四歳前後の者が多い。年長者の永山にしても三十歳は越してゐない。髪は皆薩摩風の小髷に結んでゐる。但し何れも無刀。

谷元。（橋口の腕の晒を解き終へると、窓のところに立つてゐる有馬に）おい、有馬。

有馬。（振りかへり）何だ。

谷元。少し寄つてくれ。蔭になるから。

有馬無言のまゝ少し寄る。

谷元。（傷口を見ながら）大分肉が上つて來たな。

橋口。（自分も見ながら）うム、お蔭で大變よくなつた。

谷元。併しまだ痛むだらう。

橋口。いや、もう大したことはない。今日は八日目だからな。

谷元。　もうさうなるかな。あゝ、あの晩のことを思ふとむしやくしやする。

永山。　おい、その話は止せ。もう過ぎたことだ。

谷元話を止めて繃帶をしかへてやる。

吉田。　（床に耳を押しつけてゐる是枝に）どうだ。何か聞えるか。

是枝。　駄目だ。

吉田。　波が高いせゐかな。

是枝。　これだけやつて居るのだから通じない筈はないのだがな。（又こつ〳〵と床板を叩く）

谷元。　（晒を卷きながら）少しきついか。

橋口。　いや、丁度いゝ。

谷元。　さうか。――さ、これでいゝ。

橋口。　有難う。

谷元。　（有馬に）おい、まだ小豆島は見えてゐるか。

有馬。　いや、もうとうに見えなくなつてしまつた。

谷元。　おや間もなく備後灘だな。

橋口。　（獨ごとのやうに）あゝ、あと幾日かゝるかな。

堤。　（あくびをし乍ら）何處へ。鹿兒島までか。

橋口。　うむ。

堤。　汝は馬鹿だな。國へ歸れると思つてゐるのか。

橋口。　已達は歸りたくなくつても、送り返されるのだから爲方がないさ。

堤。　だからおめでたいといふのだ。汝は自分の行く先を知らないのか。

橋口。　何をいつてゐるのだ。此船は眞直に薩摩へ行くのではないか。

堤。　おい、國のことを考へるよりも、まあ、辭世の句でも考へておけ。

橋口。　餘計なお世話だ。辭世なんか寺田屋へ集る前にちやんと書いておいた。

堤。　ふん。寺田屋か。馬鹿々々しい。

橋口。　何が馬鹿々々しいのだ。

堤。　汝はあれを馬鹿々々しいとは思はないのか。

橋口。　おい、堤。汝は眞面目でいつてゐるのか。あれは己達が生命がけでやつた爲事ではないか。

堤。　だから一層馬鹿らしいといふのだ。己達はあんなに意氣込んでゐたのに、其結果は何だ。こんな風に押し込められてしまつただけではないか。

橋口。　己は今のことをいつてゐるのではない。あれを企てた精神をいつてゐるのだ。

堤。　駄目だ〳〵。そんなものが何になる。己達は勤王だの、討幕だのと大きな事をいつてゐたつて、一體何をやつたのだ。何一つ爲出かしてゐないではないか。成程われ〳〵は幕府と內通してゐる丸條關白を夜討するといつてこの間伏見の寺田屋に集つた。併し門口から一歩も踏み出さない內に、藩から取り鎭めに來た者のために、みんな叩き伏せられてしまつたではないか。

橋口。　あれは叩き伏せられたのではない。君命だといふから一時を忍んだまでだ。取り鎭めに來たのは高が八九人の小人數だから、斬り捨てゝ通るのは容易の事だが、彼等も『賴む、賴む』と哀願するし、殊には殿樣にご憂慮をおかけ申してはと思つたから、一先づ思ひ止つただけではないか。

堤。　貴樣はあの時鎭撫使と斬合をやつて手痛い傷迄受けて居るのに、まだ目が醒めないのか。己達はこんなに幽閉されてしまつたのに、まだそんななまぬるいことをいつてゐるのか。

橋口。　なに。

谷元。　しつ。

外で重たい錠を開ける音がする。人々は默つてしまう。是枝も床を叩くことをぴたりと止める。やがて見張の役人が這入つて來る。

役人。　永山彌一郎は居るか。

永山。　（昂然と）居る。

役人。　お目附からお呼び出しだ。

永山。　目附？――よし。（心に決するところあるものゝ如く出て行く）

役人去る。續いて錠の締る音。間。

有馬。　（不安さうに）何で呼び出されたのかしら。

堤。　大抵分つてゐるではないか。

有馬。　分つてゐる――そんなことが、そんなことがあるものか。

橋口。　永山どんが殺されるといふのか。馬鹿なことをいへ。

有馬。　さうだとも。堤は先刻からいやにおちけづいて居るのだ。

橋口。　若し已達が殺されるものなら、かうして國許に護送される筈はない。京にゐた間にとうに斬られてゐる筈だ。

堤。　お前等は何處迄人がいゝのだ。こんなに欺かれ、陷れられてゐても、それがみんなに分らないのか。何よりも此間の寺田屋のいきさつを考へて見るがいゝ。君命だと稱して已達を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.